

サン = テグジュペリにおける地質学と地球観・人間観

Géologie et regards sur la Terre et les hommes chez Saint-Exupéry
Geology and Saint-Exupéry's perspective on the Earth and humanity

藤田義孝

FUJITA, Yoshitaka

大谷大学国際学部

(Faculty of International Studies, Otani University)

Résumé

Il est bien connu que SAINT-EXUPÉRY a utilisé l'avion comme outil pour revoir la position des hommes sur la Terre. Or, les découvertes géologiques de son époque ont également contribué au développement de sa perspective sur la Terre et les hommes.

Nous commençons par la lecture de l'épisode d'une confidence par Robineau dans *Vol de nuit* (1931) pour confirmer le fait que SAINT-EXUPÉRY connaissait la théorie de la dérive des continents par WEGENER, en cherchant à dévoiler les sources de cette connaissance. Ensuite, nous nous penchons sur l'épisode des trouvailles de météorites dans *Terre des hommes* (1939) où les explications géologiques font partie intégrante du récit. Enfin, nous examinons, à travers la lecture du *Petit Prince* (1943), la perspective que SAINT-EXUPÉRY portait sur la Terre et les hommes, en élucidant l'influence des connaissances géologiques sur sa pensée.

Cette étude montre que SAINT-EXUPÉRY a pu moderniser sa perception conventionnelle de la nature et préfigurer de manière allégorique l'Anthropocène grâce aux connaissances issues de la géologie. Cette influence profonde s'explique par le fait que la géologie constitue l'étude des profondeurs cachées de la Terre à travers l'observation de sa surface visible et que ce concept correspond justement au thème principal de l'auteur : percevoir l'essence invisible à travers le visible.

Abstract

It is widely acknowledged that SAINT-EXUPÉRY utilized aviation to reevaluate humanity's position on the Earth. However, the geological discoveries of his time also contributed to the development of his views on nature and humanity.

This study commences by reading an episode in "*Vol de nuit*" (1931) to investigate SAINT-EXUPÉRY's acquaintance with WEGENER's theory of continental drift, seeking to unveil the origins of this familiarity. Subsequently, we delve into the specific episode from "*Terre des hommes*" (1939) wherein geological considerations constitute integral elements of the narrative. Lastly, we conduct a comprehensive examination, focusing on "*Le Petit Prince*" (1943), of SAINT-EXUPÉRY's outlook

on nature and humanity, elucidating the influence of geological knowledge on his thought and literature.

Through this analysis, it becomes evident that SAINT-EXUPÉRY was able to modernize his conventional perception of nature and allegorically foreshadow the Anthropocene, owing to the insights derived from geology. This alignment arises from the fact that geology constitutes the study of the concealed depths of the Earth through the observation of its visible surface. This concept resonates profoundly with the central theme prevalent in the author's work: the capacity to perceive the invisible essence through the visible.

要旨

サン＝テグジュペリが地球と人間のあり方を新しい視点で捉える上で飛行機が大きな役割を果たしたことはよく知られているが、当時の地質学もまた作家の自然観・人間観の形成に寄与したのである。『夜間飛行』（1931年）にはウエグナーの提唱した大陸移動説の知識が見て取れるし、『人間の大地』（1939年）には地質学的考察が主となるエピソードが存在している。本研究では、これらの作品の記述を分析した後、『星の王子さま』（1943年）を視野に入れてサン＝テグジュペリの自然観と人間観を概観し、地質学の知見が彼の思想と文学に何をもたらしたかを検討する。

検討の結果、サン＝テグジュペリが伝統的な自然観を更新し、人新世を寓意的に予告することができたのは、地質学の知見によるところが少なくないと分かった。というのも、地質学は、大地の観察を通じて見えない深層に迫る学問であり、その点で「見えるものを通して見えない本質を見る」という作家の主要テーマと軌を一にするからである。

1. はじめに

サン＝テグジュペリ（Antoine de SAINT-EXUPÉRY, 1900–1944）にとって、飛行機は単なる乗り物にとどまらず、地球と人間のあり方を捉え直すための新しい認識の道具となった。そのことは作家自身が「僕らが地球の本当の顔を発見することができたのはこの道具のおかげだ」と述べる通りである¹。しかし、彼が地球と人間のあり方を新しい視点で捉える上で大きな役割を果たしたのは飛行機だけではない。当時の地質学もまた作家の自然観・人間観の形成に少なからず寄与したのである。たとえば、『夜間飛行』（*Vol de nuit*, 1931）にはウエグナーの提唱した大陸

移動説の知識が見て取れるし、『人間の大地』（*Terre des hommes*, 1939）では地質学的考察が主となるエピソードが語られている。これら2つの作品は、奇しくもサン＝テグジュペリが文学賞を獲得した作品であり²、地質学の知見が含まれた作品が文学として高い評価を受けたことになる。ただし、『夜間飛行』における地質学への言及は作家の伝記的要素の反映という側面が強く、作品内ではあくまで周辺的な要素に留まるため、地質学が本質的な意味で文学に貢献したといえる作品は『人間の大地』ということになるであろう。

では、大陸移動説をはじめとする地質学の知識は、サン＝テグジュペリの文学、そして彼の自然観・人間観に何をもたらしたのだろうか。その点を明らかにするため、本研究では、『夜間飛行』に見られる大陸移動説の知識を確認し、大陸移動説のフランスへの受容をめぐる状況を押さえた上で、作家が大陸移

1 サン＝テグジュペリ [著], 渋谷豊 [訳] (2015):『人間の大地』, p. 84。以降の引用では丸カッコ内にページ数を示す。なお、フランス文学研究においては、作品参照は底本となる原著のページ数を記し、論者による和訳を示すのが一般的であるが、学際的共同研究の成果は、フランス文学の専門家ではない読者に読まれることに大きな意義があると考えられることから、本稿では作品参照を容易にするため既存の訳本を用いる。

2 『夜間飛行』はフェミナ賞、『人間の大地』はアカデミー・フランセーズ小説大賞をそれぞれ出版年に受賞している。

動説に触れた経緯について考察する。続いて、地質学的考察が明確に見て取れる『人間の大地』の記述を分析した後、『星の王子さま』にも目を向けてサン＝テグジュペリの自然観と人間観を概観し、地質学の知見がサン＝テグジュペリの思想と文学に何をもたらしたのかを検討する。

2. サン＝テグジュペリと大陸移動説

2-1. 『夜間飛行』と地質学

『夜間飛行』に登場する中間管理職、監督官のロビノーは、飛行士ペルランに地質学への関心を明かしている。ロビノーは黒っぽく丸い小石を見せ、次のように打ち明ける。

「これはサハラからもって帰ってきたんだ……」

監督官はこんな話をうちあけてしまったことに顔を赤くした。神秘の扉を開くこの黒ずんだような小石さえいくつかあれば、どれほどの落胆にも、失敗した結婚や灰色の現実にも、慰めを得ることができるのだ。

ますます顔を赤くして、こう言った。

「ブラジルでも、これとおなじものが見つかるんだよ……」

ペルランは、遙かなアトランティスの名残りに思いをはせている監督官の肩をたいた。

ペルランのほうがためらうように訊ねた。

「地質学がお好きなんですね？」

「熱中していてね」

人生で、ただ石ころだけがなぐさめなのだった。³

ロビノーがサハラ砂漠で手に入れたという黒い小石は、『人間の大地』で収集のエピソードが語られる隕石と考えられる。それと同じような隕石がブラジルでも見つかるということは、隕石群が降り注いだ太古の昔には、アフリカ大陸と南アメリカ大陸が一つだったことを意味する。つまり、ここでロビノーが提示している黒い小石は、ウェゲナーの提唱した大陸移動説を支える証拠の一つと考えられる。このくだりから、作家自身が大陸移動説に少なからぬ関心を寄せていたことが推察される。もっとも、ロビノーは物証のない伝説のアトランティス大陸を夢想しているが、それは登場人物の現実逃避傾向を戯画

化した描写であろう。というのも、ロビノーという登場人物は、サン＝テグジュペリが自分自身をモデルにやや皮肉な視点で描いた人物像と見なしうるからである⁴。

このように、『夜間飛行』における地質学への言及は明示的であり、サン＝テグジュペリの地質学への関心を示す明確な証拠といえる。ただし、伝記的観点からは興味深いのが、『夜間飛行』の作中における地質学の役回りは脇役ロビノーにとっての趣味であり、現実逃避の手段にすぎない。そのため、文学作品に何をもたらしたかという観点に立つなら、地質学が『夜間飛行』において重要だと評価することは難しいだろう。

2-2. ウェゲナーの大陸移動説をめぐる紆余曲折

『夜間飛行』を見る限り、サン＝テグジュペリがウェゲナーの大陸移動説に触れていたことは間違いないと考えられるが、彼がドイツ語でウェゲナーの原著を読んだとは思われない。では、大陸移動説はいつフランスに紹介され、翻訳されたのだろうか。

ウェゲナーの『大陸と海洋の起源』初版は1915年に出版され、増補改訂された第二版が1920年に、第三版が1922年に、第四版が1929年に出版された。西欧諸語に翻訳されたのは第三版であり、1924年にフランス語版、英語版、スペイン語版、1925年にロシア語版、1926年にスウェーデン語版が出版された⁵。つまり、大陸移動説がフランスで議論されるようになったのは『大陸と海洋の起源』初版発行の1915年から7年を経た1922年以降のことであり、同書のフランス語訳が出たのはさらに2年後の1924年のことであった。このような遅れはなぜ生じたのだろうか。大陸移動説がフランスに紹介されるまでの紆余曲折を見ておこう。フィリップ・ルヴィグラーによると、大陸移動説の紹介や翻訳が遅れた理由は、第一次大戦時のドイツの科学界の姿勢によるのだという。

ドイツの気象学者アルフレッド・ウェゲナーによって第一次大戦の直前に提唱された大陸移動説は、1922年になるまで学界で反響を得ることはなかった。実際

3 サン＝テグジュペリ [著]、二木麻里 [訳] (2010) : 『夜間飛行』: pp. 41-42. 以降の引用では丸カッコ内にページ数を示す。

4 ポール・ウェブスター [著]、長島良三 [訳] (1996) : 『星の王子さまを探して』: p. 157.

5 Le VIGOUROUX (2011): p. 190.

のところ、1914年にドイツの学者・科学者たちがドイツ軍を支持したことへの反発から、大戦中を通じて国際的な学術交流は凍結され、さらには諸団体がドイツ科学界へのボイコットを組織することとなった。フランスの地質学者たちも、非難文書を発表し、ドイツの科学者と距離を置こうとするなど、完全にこの文脈に沿った動きを取っており、とりわけ1922年にブリュッセルで開催された国際地質学会においてその傾向は顕著であった。こうした状況下で、1922年にスイスの地質学者エリー・ガニュバンがウエゲナーの理論を紹介して以降、フランスでようやく大陸移動説が議論されるようになったのである。⁶

つまり、第一次大戦の敵国ドイツの侵攻を支持したドイツの科学者や科学界との交流凍結が、1914年から1922年まで続いていたのである。しかし、1922年に、ローザンヌ大学の地質学研究室でモリス・リュジョンの助手を務めていたエリー・ガニュバン（1891-1949）が「アルフレッド・ウエゲナーの理論による大陸移動説」と題する記事を『純粹科学・応用科学評論』という雑誌に掲載して、大陸移動説がフランスの地質学者と公衆に初めて紹介された⁷。そして1924年には『大陸と海洋の起源』のフランス語訳が出版され、フランスでも広く大陸移動説が知られるようになったのである。

2-3. サン＝テグジュペリと大陸移動説

こうして、数年の時間差はあったものの、大陸移動説がフランスにも紹介され、サン＝テグジュペリもウエゲナーの著作に触れる機会がもたらされた。サン＝テグジュペリが『大陸と海洋の起源』を読んだという記述や証言は見つからないため、いつどのように大陸移動説に触れたかという具体的な経緯については不明であるが、彼が1927年から1929年にかけての約1年半の間、キャップ・ジュビーで飛行場長を務めていた期間に読んだ可能性が高いと考えられる。

キャップ・ジュビーは飛行場周辺をスペイン兵に守られた海辺のごく限られた場所で、周囲はスペイン領とは名ばかりの不帰順族（ムーア人）が跋扈する土地だったため、散歩すら限られた範囲しかでき

ない環境だった⁸。そこに赴任したサン＝テグジュペリは「修道僧のような生活を送っている」と母親に書き送っている⁹。彼は飛行場の責任者として、パイロットの救出や現地での外交交渉といった困難な仕事をやり遂げながら、カメレオンや狐を手懐けたり、読書や執筆に勤しんだりしていた。後に『人間の大地』において語られる地質学の知見は飛行路線のサハラ沿岸部に関するものが多いことから、キャップ・ジュビー赴任中に、恐らく地質学の書物も取り寄せて読んでいたのだろう。その中に『大陸と海洋の起源』のフランス語版も含まれていたのではないだろうか。

なお、『夜間飛行』のロビノーは「失敗した結婚」の失意に対して地質学に慰めを見出していたが、サン＝テグジュペリがコンスエロと結婚したのは『夜間飛行』出版と同年の1931年なので、その点は伝記的事実と異なると思われる。しかし、仮に作家が何らかの失意に対して地質学に慰めを見出したのが事実だとすれば、恐らくは元婚約者のルイズ・ド・ヴィルモランやルネ・ド・ソーシーヌといった女性との失恋がその原因であろう。1927年から1930年ごろにかけてのサン＝テグジュペリは、サハラの地で失恋の痛手を癒したり、あるいは初めての南米の地で中間管理職を務める苦勞からしばし逃れるため、ロビノーのように、はるかな昔に存在した大陸に思いを馳せていたのかもしれない。

3. 『人間の大地』における地質学的考察

『夜間飛行』においてロビノーに慰めを提供していた隕石の実物は、サン＝テグジュペリがサハラ砂漠で拾ったものである。隕石収集のエピソードは『人間の大地』で語られているが、そこでは地質学の知識が物語の血肉となっている。たとえば、隕石を拾う場面に先立ち、現場周辺の地形についての地質学的解説がなされている。

サハラ砂漠の沿岸地帯、キャップ・ジュビーとシズネロスのあいだを飛んでいると、ところどころに円錐台の丘が見える。その幅は数百歩程度のものから三〇キロメートル程のものまでさまざまだが、高さはみご

8 稲垣直樹（1992）：pp. 53-57。

9 サン＝テグジュペリ著作集、清水茂・山崎庸一郎〔訳〕（1987）：『母への手紙・若き日の手紙』：p. 209。

6 *Ibid.*: Résumé.

7 *Ibid.*: p. 190.

とに統一されていて、三〇〇メートルと決まっている。いや、同じなのは高さだけではなく、色合いも、土の肌理も、崖の形状も同じなのだ。砂の中から神殿の柱が何本か顔を覗かせていれば、それだけで崩壊した祭壇の様子が分かるものだが、それと同じように、サハラ沿岸地帯に点在するこの円錐台の柱から、かつてそれを一つに束ねる巨大な大地があったことが分かる。(p. 92)

飛行士たちが飛行機の故障で不時着せざるをえない場合には、こうした丘の上の地面が堅固なので、そこを選んで着陸していたという。それは「小さな貝殻が大量に積もってできた丘」であり、「最初に貝殻が積もった場所、つまり丘の土台に当たるところでは、すでに純然たる石灰岩と化している」(p. 94)という。このような地質学的解説は、隕石を拾った事実をただ珍しい体験として語るためだけであれば省くこともできたかもしれない。しかし、ここでは地質学的な知見に裏付けられた観察と分析そのものが物語の興味の対象であり、その考察があつてこそ、次のように、一見何の変哲もない黒い石の発見が、興奮をもたらす知的発見となるのである。

(…) この白い高台はもう何十万年も前からただ星々にだけ捧げられてきたのだと[思った]。澄んだ空の下に純白のシーツをびんと張ったような感じだった。そのシーツの上の、僕から十五メートルか二〇メートルほど離れたところに黒い小石が一つ落ちているのを見つけたとき、僕は一大発見の予兆を感じたときのように胸に衝撃を感じた。

僕が立っているのは厚さ三〇〇メートルの貝殻の堆積の上だった。この巨大な足場全体が、いわば異論の余地のない証拠として、こんなところに石があるはずがないと訴えていた。(…)僕は胸を高鳴らせながらこの思いがけない幸運の種を手にとった。それはこぶし大の硬質な漆黒の小石で、金属のように重く、涙の形をした鑄型に流し込んで作ったような形状をしていた。(pp. 95-96, []内は論者の補足)

このくだりは、先立つ地質学的観察や考察がなければ、単に白い地表上の黒い石に気づいて拾い上げただけの話に留まっただろう。だが、地上300メートルに貝殻が堆積した時のまま、「何十万年も前からただ星々にだけ捧げられてきた」環境の特殊性を理解していたからこそ、黒い石という物体の発見は、

直ちに「隕石」の発見につながったのである。周囲から孤立した石灰質の地表に転がる石は、空から落ちてきた隕石でしかありえないという推論に基づく「発見」であり、その知的興奮が「僕」の胸に衝撃を与えたのだ。ただ偶然に黒い石を見つけたというだけなら、頭に浮かぶのは「これは何だ？」という疑問か、最悪の場合は「なんだ、石ころか」という無関心に留まるはずだからである。そして、地質学的観察に支えられたサン＝テグジュペリの知性と想像力は、科学的知識を媒介に、さらなる推論を展開していく。

リンゴの木の下に広げたシーツには、リンゴの実しか落ちてこない。それと同じで、星空の下に広げたシーツには、星のかけらしか落ちてこないはずだ。これだけ身元のはっきりしている隕石はほかに考えられなかった。(p. 96)

ここで唐突に言及されるリンゴの木とは、もちろん万有引力の法則を発見したニュートンの逸話を念頭に置いたものである。木から落ちたリンゴも、宇宙から落ちてきた隕石も、どちらも地球の引力で落ちたものである。ただし、ここで作家は、単純に引力という共通項のみに基づいて自分の発見をニュートンの発見になぞらえているわけではないだろう。万有引力の法則発見のポイントは、リンゴが落ちるという目の前の現象を、地球とリンゴの関係として宇宙的視点で捉えてみせた認識スケールの大きさにある。こうした科学的想像力の広がりこそ、サン＝テグジュペリがニュートンから受け継いだものといえるのではないだろうか。なぜなら、『人間の大地』の語り手は、次のように時間的スケールの大きさでも読み手を圧倒するからである。

そこで、当然ながら僕は頭を上げてこう考えた。この天上のリンゴの木から、他にもリンゴの実が落ちなかったはずがない。(…)

はたして仮説は実証された。ほぼ一ヘクタールにつき一個の割合で宝物が見つかったのだ。どれも捏ねた溶岩のような恰好をしていて、黒ダイヤの硬さを誇っていた。こうして僕は、僕だけの星の雨量計の上に立って時間を軽々と飛び越えながら、数十万年前から降りつづける火の驟雨に立ち会ったのだ。(p. 96)

先ほど見られた宇宙への想像力という空間的スケールに対し、ここでは時間的スケールの大きな語りが特徴的である。上記引用文で「数十万年前から降りつづける火の驟雨」と説明的な訳になっている箇所は、原文では「この緩慢な火の驟雨」*« cette lente averse de feu »* というコンパクトな比喩表現であり¹⁰、物語内容の時間幅との対比をいっそう大きく感じさせる効果を持つ。なぜなら、わずか数語の表現で、数十万年にわたる現象が語られているからである。しかも、その対比を「緩慢な驟雨」という撞着語法（矛盾形容法）がさらに強調している。短時間にざっと集中して降る「驟雨」（averse）と、形容詞の「緩慢な」（lente）が合わさることで、降り止むのに数十万年を要する並外れた緩慢さと、それほど長きにわたる現象さえ「驟雨」と捉える地質学的／宇宙的視点のスケールの大きさが印象づけられる。ここでサン＝テグジュペリは、飛行士という地理的な冒険家にとどまらず、科学者の視線で認識可能な時空を広げようとする、いわば知的冒険家としての姿を示しているのだ。地質学は、そうした知的探索に必要な知識の源の一つだったのである。

4. サン＝テグジュペリの自然観・地球観

それでは、地質学への関心を文学にまで昇華したサン＝テグジュペリの自然観・地球観とは、どのようなものだったのだろうか。以下では、フランスやヨーロッパの伝統的な自然観との関わりも視野に入れつつ、サン＝テグジュペリの自然観・地球観を概観し、地質学が作家の作品や思想の形成にどのように寄与したのかを検討する。

先に見た、時間的スケールの大きさが印象的な隕石収集のくだりに続いて、語り手は次のように述べている。

だが、何より驚くべきことは、そこに僕という一人の人間が立っていたことだ。つまり、この惑星の丸い背の上、隕石を引き寄せる力を持つ純白のシーツと星空とのあいだに、さながら鏡のように火の驟雨を映し出す人間の意識が存在していたことだ。鉱物質の土台の上に存在する夢、それは一つの奇跡だ。（p. 97）

10 Antoine de SAINT-EXUPÉRY, *Œuvres complètes*, Paris : Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome 1, 1994, p. 206.

自然科学者の眼差しで、宇宙と地球をめぐる物理的現象に感嘆した後、サン＝テグジュペリは一転して、そうした壮大な現象を認識する人間の意識の存在に注意を向ける。ここで鉱物と夢（夢想）が対置されているのは、無機物・鉱物から有機物、生物を経て霊長類、そして人間の知性と精神へという、単純なものから複雑で精妙なものへという進化の階梯を前提に、もっとも原始的な無機物ともっとも進化した人間の意識を対比することで、鉱物から長く複雑な進化の過程を経て遂には宇宙を認識するにいたった人間精神の奇跡のような価値を強調するためである。空間と時間が無限に広がる宇宙を前にすると、人間はただ圧倒され驚嘆するほかないが、その広がりや認識しうる人間の精神自体が、驚くべき特別な存在であることをサン＝テグジュペリは説いている。このように宇宙と人間精神を対置する構図は、有名な「考える葦」の比喩を用いたパスカルの自然観・人間観を受け継ぐものといえる¹¹。物理的にはちっぽけで脆く儂い人間は、その認識能力、知性と精神性において宇宙と対峙しうる存在となるのである。

ただし、サン＝テグジュペリにとって、人間はただ認識のみによって気高いとされるわけではない。人間が自らを知り、その価値を証立てるには、自然という障害に立ち向かわなくてはならない。そのことは『人間の大地』の冒頭に明言されている。

大地は僕ら自身について万卷の書よりも多くを教えしてくれる。なぜなら大地は僕らに抗うからだ。人間は障害に挑むときにこそ自分自身を発見するものなのだ。（p. 13）

11 「人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。／だから、われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれが満たすことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。」（パスカル〔著〕、前田陽一・由木 康〔訳〕（1973）：『パンセ』：p. 225）

大地の抵抗に打ち勝って人間の価値を証明する行動の模範例として語られるのは、遭難から生還した親友ギヨメのエピソードである。雪深いアンデス山中で遭難したギヨメは生存が絶望視されていたが、三日三晩歩き続けて生還した。ギヨメから聞いた打ち明け話の中でサン＝テグジュペリが最も感銘を受けたのは、「誓ってもいい、僕がしたことは他のどんな動物にも真似できない」(p. 63)という言葉だった。この自負に満ちた断定は、創世記第1章において「海の魚と、天の鳥と、地に動くすべての生物を支配せよ」と命じた神の言葉に対し¹²、自身があらゆる動物に勝ることを行動で証明してみせた人間からの力強い応答となっている。だからこそ、サン＝テグジュペリも「人間の居場所を定め、人間を顕彰し、自然界の真のヒエラルキーを再建するこの言葉」(pp. 73-74)と称賛を惜しまなかった。このギヨメの言葉について、ポール・ウェブスターは次のように述べている。

その言葉は、フランスの文学史上もっともたびたび引用されるもののひとつで、人間は自然と自分自身を超えるために生まれてきたのだ、というサン＝テグジュペリの信念を要約している。¹³

自然を従え、さらなる高みを目指す人間のあり方は、人間が万物の霊長として自然と動物を支配する存在だというキリスト教的自然観・人間観を再確認するものである。そして、自然の管理者としての人間の姿を寓意的な形で見て取ることができるのは、『星の王子さま』における惑星の管理者としての王子の姿であろう。バオバブのエピソードが示すとおり、ひとたび自然の管理を怠れば、人間の生存環境は直ちに脅かされる。

12 「そこで神が言われた、「われわれは人をわれわれの像の通り、われわれに似るように造ろう。彼らに海の魚と、天の鳥と、家畜と、すべての地の獣と、すべての地の上に這うものごとを支配させよう」と。そこで神は人を御自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。そこで神は彼らを祝福し、神は彼らに言われた、「ふえかつ増して地に満ちよ。また地を従えよ。海の魚と、天の鳥と、地に動くすべての生物を支配せよ。」(関根正雄 [訳] (1956): 『旧約聖書創世記』: p. 11.)

13 ポール・ウェブスター、前掲書、p. 162。

(…) 星の地面のそこらじゅうにバオバブの種がひそんでいました。バオバブは手遅れになったりすると、もう引き抜くことができなくなってしまいます。惑星じゅうに広がってしまうのです。根を張って惑星に穴をあけます。もし、惑星が小さくて、バオバブがたくさん生えすぎたりしたら、バオバブの根の力で惑星は破裂してしまいます。¹⁴

こうして、自らの生存環境を守るため、たえず星の管理に目を光らせる王子は、植物だけでなく火山の管理さえ行っているという。

(…) ちゃんと煤払いをしておけば、火山は穏やかに規則正しく燃えつづけ、噴火はしないものです。火山の噴火は、暖炉からあがる火のようなものです。いうまでもなく、私たちの地球では、私たち人間は体があまりに小さすぎて、火山の煤払いはできっこありません。そのために、火山はいろいろと面倒ばかり起こして、私たちを困らせるのです。(pp. 54-55)

地球は大きすぎて火山の煤払いはできないという断り書きはあるものの、火山の手入れをする王子の姿は、惑星を管理して暮らしやすい環境を維持しようとする人間のあり方を寓意的に示すといえるのではないか。2000年代以降、人間の活動が地球環境に大きな影響を及ぼす時代として「人新世」という地質年代区分が提言されているが、危険なバオバブの芽を抜き、火山の煤払いをして惑星の維持管理に努める王子の姿は、いわば時代を先取りした人新世の寓意と見なすこともできるのではないだろうか。

このように、サン＝テグジュペリの自然観・人間観は、人間を自然界の頂点に置く伝統的なキリスト教的自然観を基点とし、人間の認識・思考能力に重きを置いたパスカルの人間観を受け継ぎながら、鉱物から生物に至る進化の極致に人間精神を位置付けるものである。つまり、進化論の考え方を取り入れながらも、フランスの古典的な自然観・人間観を踏襲するものといえるだろう¹⁵。

14 サン＝テグジュペリ [著]、稲垣直樹 [訳] (2006): 『星の王子さま』: p. 34。以降の引用では丸カッコ内にページ数のみ示す。

15 キリスト教的自然観に進化論を組み入れ、宇宙における人間存在に奇跡のような希少性と特別な価値を見出す人間観は、テイヤー・ド・シャルダン (1881-1955) の思想と共通するところが多い (DEVAUX (1962): pp. 22-25)。

では、サン＝テグジュペリの説く自然観・人間観に思想面での新しさは見られないのだろうか。だが、『星の王子さま』に見られる、惑星を維持管理する王子の姿を人新世のアレゴリーと捉えることが可能だとすれば、やはりそこには新しい観点が含まれているといわねばならない。それは、飛行路線が地球全体を覆う時代には、無限に広がる外なる自然はもはや存在せず、我々は皆「人間の大地」の上に生きているという認識である¹⁶。『人間の大地』で語られた「僕らは皆、同じ惑星によって運ばれている仲間であり、同じ船の乗組員なのだ」(p. 282)という言葉は、1960年代後半以降広く知られたバックミンスター・フラーの「宇宙船地球号」の考え方を一部先取りするものともいえるが¹⁷、このように、自然は無限の外部ではなく人間が維持管理すべき生存環境であるという、いわば「自然観」から「地球観」へのアップグレードが、サン＝テグジュペリの思想的貢献だったといえるかもしれない。

5. おわりに

以上のように、地質学は、『夜間飛行』ではサン＝テグジュペリ自身の地質学への関心を反映する形で脇役ロビノの趣味として描かれるに留まったが、『人間の大地』においては物語の重要な縦糸として地質学的考察と発見が語られ、科学的知見によって更新された自然観・地球観に基づくヒューマニズムが説かれた。その結語では、「精神の風が粘土の上を吹き渡るとき、初めて人間は創造される」(p. 292)と、大地に対する精神の優位が示唆され、「大切なものは目には見えない」(p. 127)という『星の王子さま』のキツネの言葉につながっていく。ただし、『星の王子さま』では、自然を人間が維持管理すべき環境と捉えるような、人新世を寓意的に予告する地球観も提示されていた。

したがって、『星の王子さま』最後の挿絵が暗示するとおり、見えるものを通して見えない本質を見ることが肝要なのだ。王子が休火山の噴火という「見

えない」脅威に備えることができるのも、地質学という大地についての学問があつてこそである。内藤濯訳の邦題によって宇宙のイメージが強い『星の王子さま』においても、地質学は重要な意味を担っているのだ。それというのも、地質学とは、目に見える大地の観察を通じて、目に見えない地球の深層やその歴史に迫ろうとする学問であり、その点で「見えるものを通して見えない本質を見る」という作家の主要テーマと軌を一にするからである。

このように、サン＝テグジュペリにとっては、飛行機と同様に地質学もまた、地球と人間について認識を深める上で重要な視座を提供するものであった。彼が地質学や鉱物について理解を深めたからこそ、人間存在とその精神の価値をいっそう深く感じ取り、目に見えない本質を称揚したのだとすれば、地質学は、まさにサン＝テグジュペリの思想やヒューマニズムを下支えする地層のような役割を果たしたといえるのではないだろうか。

文献

- 稲垣直樹 (1992) : 『サン＝テグジュペリ』。224 ページ、清水書院、東京。
- サン＝テグジュペリ [著]、清水 茂・山崎庸一郎 [訳] (1987) : 『母への手紙・若き日の手紙』(サン＝テグジュペリ著作集)、359 ページ、みすず書房、東京。
- サン＝テグジュペリ [著]、稲垣直樹 [訳] (2006) : 『星の王子さま』(平凡社ライブラリー)。179 ページ、平凡社、東京。*原著は SAINT-EXUPÉRY, Antoine de (1943) : *Le Petit Prince*。
- サン＝テグジュペリ [著]、二木麻里 [訳] (2010) : 『夜間飛行』(光文社古典新訳文庫)。186 ページ、光文社、東京。
- サン＝テグジュペリ [著]、渋谷 豊 [訳] (2015) : 『人間の大地』(光文社古典新訳文庫)。349 ページ、光文社、東京。
- 関根正雄 [訳] (1956, 1999 改版) : 『旧約聖書 創世記』(岩波文庫)。272 ページ、岩波書店、東京。
- パスカル [著]、前田陽一・由木 康 [訳] (1973) : 『パンセ』(中公文庫)、644 ページ、中央公論社、東京。
- バックミンスター・フラー [著]、芹沢高志 [訳] (2000) : 『宇宙船地球号操縦マニュアル』(ちくま学芸文庫)。210 ページ、筑摩書房、東京。*原著は FULLER, R. Buckminster (1968-69) : *Operating Manual for Spaceship Earth*。
- ポール・ウェブスター [著]、長島良三 [訳] (1996) : 『星の王子さまを探して』(角川文庫)。352 ページ、角

16 「大地」を意味する terre は、la Terre で「地球」の意味になることから、作品タイトルの Terre des hommes は「人間の地球」と読み換えることもできる。

17 バックミンスター・フラー [著]、芹沢高志 [訳] (2000) : 『宇宙船地球号操縦マニュアル』 : pp. 47-55。

- 川書店, 東京。*原著は WEBSTER, Paul (1993): *Saint-Exupéry*.
- DEVAUX, André-A. (1962): *Teilhard et Saint-Exupéry*. 63 pp., Éditions universitaires, Paris.
- LE VIGOUROUX, Philippe (2011): La Première Guerre mondiale et ses conséquences sur la réception de la théorie de Wegener en France. *Travaux du Comité français d'Histoire de la Géologie*, 3ème série (tome 25, n° 8), 187–206. hal-01061176
- SAINT-EXUPÉRY, Antoine de (1994): *Œuvres complètes*. « Bibliothèque de la Pléiade », tome 1, 1210 p., Gallimard, Paris.

